

社会化の始まりと終わり

加藤 隆雄（武蔵野女子大学）

1. 社会化研究の過程—社会化過程の研究—

日本における社会化の研究は、1960年代～1970年代にはパーソンズ理論や役割理論などに触発された研究が中心であった。1970年代後半になると階級と社会化との関連が強い興味をもたれた。1980年代後半に新たな理論的関心をひきつけたのは、（そこに主体性を認めるにせよ認めないにせよ）社会化過程の研究だったということができると思う。この背景には、ひとつには1960年代末以降、社会学のオルタナティブとして注目されてきたエスノメソドロジーに代表される「ミクロ社会学」の影響があった。社会のミクロ過程とマクロ構造との接合ということが社会理論家の新たな課題となったのもこの1980年代という時期であるが、それも「ミクロ社会学」の成果を踏まえてのことであった。ブルデュの「ハビトゥス」やギデンズの「実践的意識」といった概念は、それぞれ哲学の領域まで視野におさめてはいいるが、やはり社会学理論におけるミクロ—マクロ接合ということを目指の一つとしてはいたのである。こうした概念も、さらに「ミクロ社会学」の理論そのものも、社会化過程の研究にとっては、それまでの過程研究がそうであったように心理学的な概念に頼って自らを心理学化してしまうことなく、社会学研究であり得るための手がかりを与えてくれるものだった。こうした装備を得て社会化過程の研究は、それまでは機能として、あるいは実際のところは結果から遡及して想定されるところの原因として、ブラックボックスとして扱われてきた社会化のプロセスそのものを解明し理論化しようとした。そして、社会化のプロセスこそが社会学理論におけるミクロ—マクロ接合の重要なリンクのひとつであるという認識（あるいは自負）もそこにはあったように思う。

このような社会化過程研究は、当然のことではあるが、社会化過程の存在そのものについて疑念をさしはさむことはなかった。のみならず、社会化が人類のどのような共同体においても普遍的なプロセスとして存在しているということを信じていたのである。これは「子ども」の観念が近代になって成立したとする《アリエス・パラダイム》や、近代教育の基本的前提を問

い返そうとする研究を目の前にしても揺るがされることのない確信であったように思われる。事実、どのような社会も成員のリクルートメントなしには存続できないのであるから、このような信念が改めて検討されなかったのももっともなことであった。しかし、現在、子どもの社会化の様相が、そして子どもと社会化と社会との関係が変貌したとの認識が進むに及んで、社会化という概念の説明能力も限界を迎えたかのように見える。デュルケムが考え、パーソンズが精緻化して社会学理論上に明確な場所を与えた社会化の概念ではすでに現実には捉えられない、というようにわれわれの目には映るのである。子どもの社会化とは、概念や分析用具や理論装置や説明変数であるよりも、一つの理想だったのではないだろうか。ここに至って、この社会化という理想、社会化という思想の由来を問い直す作業が必要となるのである。

2. 社会化の始まり—社会化の社会化—

「社会化」の観念を問題とする場合、われわれはどうしてもデュルケムの19世紀末のフランスに戻らなければならない。中世以来の身分制を強く残したアンシャン・レジームを崩壊させた革命以降も、フランスの政治体制は目まぐるしく変わらざるを得なかったが、革命から百年ののち、その成果はデュルケムの目には「機械的連帯」による社会が「有機的連帯」を原理とする社会へと移り変わろうとしたものとして捉えられた。1880年代に公教育制度がほぼ完成するに至って、デュルケムが教育にかけた期待は大きかった。教育による子どもの社会化は、真の市民社会・国民国家を実現するための必要条件だった。しかし、そもそもデュルケムにおいて社会化は二重だった。

…各社会は人間に関して肉体的および道徳的見地からと同様に、知的見地からも人間はどうあるべきかについての一定の理想を作りあげる。この理想はある程度まですべての市民にとって同一である。そして、ある点を越えるとすべての社会がその内部に包含している特殊な環境に応じてその理想は分化する。…教育はそれゆえ次のことを子どもに生ぜしめることをその機能とする。（1）子どもが属している社会が、そ

のいかなる成員にも欠如してはならないと考える肉体的及び精神的な一定状態。(2) 特殊な社会集団(カースト、階級、家族、職業)が、それに所属しているすべての者に同様に存在しなければならないとみなす若干の肉体的および精神的状態。…この理想を決定するのは全体としての社会、特殊な各社会環境である。(エミール・デュルケム『教育と社会学』佐々木交賢訳、誠信書房、1976年、57頁)

つまり、第一に国民国家のメンバーたる市民としての社会化、公共的な社会化(「第一の社会化」と略記)であり、第二に特殊な社会環境、個別の共同体のメンバーとしての社会化(「第二の社会化」と略記)である。しかし、古代社会以来存在していたのは、第二の社会化のほうである。デュルケムはそれを転倒させた。第二の社会化の方を第一の社会化に連結・接合すること、有機的連帯はそれによって保証されるのである。そしてこのような二つの社会化を連結することこそ、国民国家・全体社会の公共的秩序を保証するものだったのである。そしてこのような説明図式が必要だったことこそ、特定共同体への社会化が、公共的社会化とは同一ではなく、両者の接合関係が必ずしもオートマティックなものではないことを意味している。すべての社会が新規成員の社会化を必要としていることは確かであっても、社会化がどのレベル・範囲において必要であるかは自明ではない。デュルケムの社会理論は、まさにそれを説明するための図式なのだった。ともあれこれによって共同体の社会化は、市民社会・公共社会の社会化へと敷衍・拡張されたのであった。共同体レベルのミニ社会化は、全体社会によって管轄されることになったのである。このような転換は、社会の社会化と呼ぶことができるだろう。一つ目の「社会化」は、いままでここで用いてきた意味での社会化であり、二つ目の社会化はマルクス(主義)的な意味、つまり、「家事・育児の社会化」「財産の社会化」のような用語法におけるように、個人や家族やより小さな共同体に属していたものを、より大きな社会へと帰属させるという意味において用いている。デュルケム以前にすでに、国民国家に属する人間の身体・内面、さらに家族の管理が進行していたことは、フォーコーやドンズローの研究が示すとおりである。身体や家族の社会化の延長線上に、デュルケムにおけるこの社会化の社会化が位置していたということが出来るであろう。

3. 普遍的な社会化の終わり

このように社会化には、その概念の出現そのものに歴史性が刻印されている。つまり、社会化はわれわれが普遍的と考える形で出現したのではなく、国民国家・市民社会に関連づけられる形で、つまり(第二のマルクスの意味で)社会化されることで初めて概念化されたのである。しかし、ここにはさらに錯綜した関係性が含まれている。

デュルケムの述べる社会化には「理想」という表現が含まれている。社会がもし「人間はどうあるべきかについての一定の理想を作りあげる」のだとすれば、デュルケムの生きた社会自体もまた、一定の理想を作り上げていたはずである。つまり、デュルケムの一般論をデュルケム自身にも適用すれば、それはデュルケムが置かれた立場をまさに表明するものになる。デュルケムの社会は、国民国家・市民社会へ向けた社会化という理想を必要としたのである。

社会化という観念が国民国家・市民社会に関連づけられる形で生まれたということは、社会化という観念がそもそも第二の個別特殊な社会化の概念をモデルとして生まれたわけではなかった、ということ意味する。デュルケムが社会化の概念に行き当たったのは、国民国家・市民社会・全体社会への社会化という観念を有していたからであった。人類普遍・通歴史的であるかのように信じられている社会化は、全体社会への社会化の下位形態、第一の社会化への補遺として生まれたのである。第二の社会化、つまり共同体における社会化(こちらは人類普遍・通歴史的な社会化であると考えられる)は、第一の社会化、公共社会への社会化(こちらは、デュルケムの生きたフランス社会が要求したという意味で特定の歴史的背景に基づいている)の補足概念、下位概念だということは、「普遍的」社会化が時代特殊の社会化の下位概念だということである。社会化が普遍的であるという信念の中では、この上下関係は逆転されている。つまり、(個別共同体に見られるように)常に人類は社会化を行っており(上位概念)、したがって当然公共的社会においても社会化は起こっているはずだ(下位概念)、というように。それでいて、個別共同体と市民社会との上下関係に関しては、デュルケムと同様に、つまり市民社会=上位、個別共同体=下位と考える。これによって社会化が普遍的であるという信念が成立しているのである。